

■シューベルト／交響曲 第7番 口短調 D.759 「未完成」

フランツ・シューベルト（1797-1828）には思いのほか、未完の作品が多い。とくにこの有名な交響曲に着手する前の時期にはウィーンを離れて、演奏家として各地をめぐって、途中で書きかけたままのスケッチが数多く放置されている。「未完成」の通称はこの交響曲が3楽章の途中までで放置されたことに由来するのだが、じつは先立つシューベルトの空白期以前の作風とは一線を画していることも重要だ。

交響曲という名前であっても、この作品は同時代のベートーヴェンのような合理的な展開をもつ音楽ではなく、不規則でまとまりのみえないフレーズの連なり、不規則な展開、突然の転調、突然の全休止など、不均衡な形態にとりとめもない楽想が流れていく印象をもたらす。しかし、シューベルトの交響曲の魅力はハイドンやモーツァルト、ベートーヴェンとはまるで異なっている。モーツァルトの第40番を好んでいたと伝えられるシューベルトは、「未完成」でも個人的な情感を歌い込む。しかもオーケストラの楽器から生み出される色彩と和声の微妙なうつろいから、あの独特の、やわらかく温かい響きが伝わってくる。おそらく、これに先立つ時期の作品も含めて、自分の音楽の新たな方向を模索していくプロセスとしての「未完成」だったのではないかと思われる。

第1楽章アレグロ・モデラートはシンプルなソナタ形式で、低音の弦楽器による地の底からわき上がってくるような楽想に続いて、訴えかける感じの第1主題、明るい響きの第2主題が呈示される。チェロとコントラバスで呈示される冒頭のメロディは、第1楽章だけでなく、全曲の基盤となるモットーとして作品に統一感を与えている。第2楽章アンダンテ・コン・モートは最初の速い楽章に対する緩徐楽章になっているが、実際にはその対比は耳では捉えられない。ここでもメロディが歌い込まれていて、シューベルトならではの抒情的で色彩感のある音楽が繰り広げられる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：

フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 2、トランペット 2、トロンボーン 3、ティンパニ、弦五部

※スコア上の表記